

次の文章は、生物の進化や自然淘汰とうたは生物のもつ形質をより効率的で経済的な方向へと洗練させてきた結果である、ということが書かれた後に続くものである。これを読んで後の問に答えなさい。

さて今度は、<sup>(1)</sup> 経済性を度外視した、すなわち「非常識」に見える例を見ていきましょう。

進化は派手で無駄に満ちた生物も創り出してきました。派手な生物の定番としてはクジャクが挙げられます。ダーウィンが考察して以来、クジャクは生物の求愛行動を研究する者にとってシンボリックな存在となっています。

本来、鳥の羽は効率よく飛び回るために機能しているはずです。季節の変わり目に何千キロメートルも飛ぶ渡り鳥と、花の蜜を吸うためにホバリングするハチドリとでは、羽に求められる性能は違うでしょうが、いずれにせよ飛ぶことを目的に羽を使っているのには違いありません。ところが、クジャクのオスのあまりにも長い羽は、飛ぶのにかえって邪魔になっています。また、メタリックに輝く目玉模様は、むしろ捕食者に狙われるリスクが高まってしまっています。

ご存じの通り、こうした派手さは繁殖のために進化した形質です。求愛の際、オスのクジャクは羽をふるわせてメスにアピールし、メスはじっくりと観察して交尾相手にふさわしいオスを選んで

います。異性の気を引く派手で目立つ形や行動は、効率よくエサをとり、効率よく成長するという観点から見ると、はなはだ非経済的ですが、一方で、動物は成長するだけでなく、成熟したらパートナーと交尾をして子孫を残さなければなりません。だからこそ、成長のためには無駄なことに見えても、繁殖に必要な形質にも惜しみない投資をするのです。オスと違って、異性にアピールする必要のないメスが地味な見た目をしているのは、派手な姿が無駄であることの証拠にほかなりません。

クジャクの羽、グッピーの尾びれ、ライオンのたてがみ―オスだけに現れる派手さは、無駄のない洗練された行動と同じくらい、いや、むしろそれ以上に自然愛好家の関心を集めるものです。もちろん、進化生態学者にとっても格好の研究対象です。ここでは、なぜオスは繁殖のためにそもそも派手になるのか、立ち止まって考えてみましょう。この問いは、「そもそも、メスはどうして派手なオスを好むのか」と言い換えることもできます。オスとメスのコミュニケーションにおいて、もっと効率的なアピールの手段はなかったのでしょうか。

(引用先 2018 岡山大学―前期

鈴木紀之『すごい進化』)

問 傍線部(1)について、ここでいう「非常識」とはど  
ういうことか、生物における「経済性」を具体的に  
した上で、説明しなさい。